

## わがまち散歩

自宅2階のアトリエを「私のお城です」と言って笑う小田さん



毎週火曜の午前中、寺中公民館に集まり元気教室で汗を流す寺中地区の皆さん



上/小田さんが手掛けた洋服群  
下/こだわりの古布をコレクションしたアトリエの一角



8年前に熊本地震が発生した時、当時の選手団からの思いを預かった代表者が石川県から駆けつけて見舞ってくれたそうです。現区長の中村敏博さんは、「今

んです。小田さんは、毎月15日に同館で開かれる「寄つてはいよ」という集まりでも小物作りなどを提案しています。

手先が器用と評判の小田さんの普段着は全て手作りだそう。自宅2階のアトリエには、コレクションされた古布が整然と収納されています。和手ぬいで作ったワンピースや、着物をほどこいてあつらえたコートなど、おしゃれなものばかり。「体形に合う服が見つからなくて。『だったら自分で縫っちゃえ』と思って」と洋裁を始めたきっかけを話します。

「物作りをしていると時間を忘れてしまう」と夢中になって手を動かす小田さんですが、他にも写経やパン作り、ノルディックウオークなど多趣味で毎日大忙し。「1日24時間じゃ足りない。どなたか、余った時間を私にください」と、充実した日々を謳歌していました。

今年元日に震度7の地震に襲われた石川県。熊本地震を経験した私たちは、他人事とは思えない出来事に胸が締め付けられました。それはまた、寺中地区の人たちにとっても同じでした。

今から25年前、熊本国体が開催された時のことです。寺中地区では石川県成年男子バスケットボールチームの民泊を受け入れました。当時の区長で、16年前に亡くなった山本良樹さんは受け入れの責任者でした。妻の絹代さんは「選手団の人たちと家族のように過ごしました。田舎料理でもてなし、毎晩楽しくおしゃべりして。試合の応援にも行きました。だから石川の被害状況をテレビで知り、胸がつぶれるようでした」と言葉詰まらせました。

## 心の交流続いて 石川県被災地へ



今年87歳になるという山本さんはかくしゃくとしています



25年前に民泊で受け入れた、石川県成年男子バスケットボールチームの皆さんと山本さんたち(写真=山本さん提供)

度は私たちにできることをと、地区の皆さんで協力し合い義援金をお送りしました。被災地からは感謝の思いがつつられた手紙が届きました」と話します。25年前に始まった双方のご縁は、今も大切に育まれています。そして何より、被災地の一日も早い、復旧・復興を願うばかりです。